

大浦 埜都

未来を知ることが出来たらいいなと私は思う。

この世界のあらゆるものには理由がある。あらゆるものはその理由をもつものの結果である。そしてその全ては遡り続けると世界の始まりに辿り着く。違うのは神が世界を始めた瞬間だけで、後は自然の法則によって全てが連鎖していくだけだ。宇宙が生まれ、地球が生まれ、生物が生まれ、人間が生まれ、私が生まれて消えていく、すべて神の予定通りだろう。あらゆる行動や心理はただ法則に従って生じるものなのだ。その運命からは逃れられない。逃れようとするときさえ、世界の始まった時から決定されているのだ。未来を知ってこの世界から悲しみを消してしまいたい。何も間違えることなく正しく生きてきたかった。神を超える未来を知る力でしか、運命は変えることができないだろう。いや、未来を知ろうとする心理や行動さえ、神によって決められたものなのか？

決定論は私に、絶望と安心を与えてくれる。自分で自分を肯定して充実して楽しいと思いつまなければならぬこの人生が、もうすでに未来がどうなるか決まっているのなら、どうしようもないという絶望。そして、このどうしようもない人生がただ決まった通りにこうなっただけで、自分の責任ではないという安心。これはあるいは自分の無力さを認めることからの逃避かもしれないが、自由と言いつつも結局私たちは何ひとつ選ぶことができないのだから、これからどうなるかだって自分のせいじゃないし、なるようになるだけだ。言ってみれば、人生ってというのは既に書かれているシナリオにそって無意識のうちにどうしようもなく踊らされていることだろう。なんて滑稽なのだ。そんなことに喜怒哀楽するのは馬鹿らしく思えてくる。どうしたって決まっていることは何も変わらないんだ。

しかしなぜおみくじはあれほど人気なのだろうか。よく考えたら、何一つ科学的根拠など無いように思える。

これほど科学の発展した現代でなぜおみくじはまだ存在するのだろうか。何か私には認識できない決定論を覆すような超自然的な力によって、良いことを書かれているおみくじを引いたことにより人生が変わるのだろうか。

それとも結局世の中を動かしているのはイメージであり、人間の思い込みで地球はまわっているのだろうか。しかしながら、そんなことはどうでもよく、私はただ単純に神社のおみくじを全部引いてみたいと常々思っていたのだ。おみくじなんて所詮、ちよつと神聖風だけのくじなのだ。それでも、くじ引きを引く時に感じるなんとも言えないワクワクとした気持ちには魅力がある。人生で一度はやってみたかったことだ。そして、これが終わったら私は、舞台から降りることになるだろう。きつとこれは世界が始まったときから決まっている。

そして今宵ついにこの計画を実行する。おみくじを全部引くというのは犯罪なのか？受験の前には、大吉が出るまでおみくじを引くというようなことを聞いたことがあるし、きつちり引いた数だけお金を払えば問題なさそうである。

どの神社に行くのかは既に考えていた。近所というほど近くはないが自転車で行けるような距離で今まで何度も行ったことのある神社であり無人のおみくじ販売所がある。当然一人で実行する。

それから資金の調達を考えた。あのおみくじの箱にはいくつかのおみくじが入っているのだろうか。簡単に推測してみる。確か一辺二十センチくらいの立方体の箱におみくじの紙がたくさん入っていたと思う。ただ満杯に入っていたのではなく、ある程度箱の中に空間があったよ

うに思う。だから、結局入っているのは箱の三分の二程度だろうか。五センチ立方あたりに二十個のおみくじが入っていると仮定するとその六十四倍で全体で二二八〇個だから、その三分の二で八百個ちょっとくらいだろう。まあ約八百個だとすると、値段は八万円か。まあ大金ではあるが、問題ないだろう。はじめは両替して全部百円玉で払おうと思っていたが、両替には手数料がかかるよーうだし、神社の側としてもおみくじが八百枚の百円玉に変わるよりは、多少まとまっていた方がいいだろう。そんなこと考えながら、結局自分の都合で五百円玉を使って払うことにした。三年ほど前から五百円玉で貯金をしてきたのだ。随分前に十万円と書かれた銀色の缶がいっぱいになった。本当に十万円分あるかは分からないが、もし足りなくなったら嫌だし、念の為缶の中身を全部持っていきよう。

そして午後五時半を過ぎた頃、人生最後の参拝をした後、私は一人おみくじの箱の前に立つ。幾度となく見たはずの一本百円の文字を見て、おみくじの単位は本だったのだと知る。興奮か緊張か体全部が浮いているような気がする。いざおみくじを引こうとすると、不思議な気持ちになる。記念すべき一本目はきちんと百円玉を使って引く。一瞬間こうかと考えるが、結局開かないまま、バックに入れる。予定通りお金を払い、おみくじを引くという作業を続ける。五百円玉を入れ、五本のおみくじを引く。単純な作業の連続だ。持ってきた黒いバックの中がおみくじで埋まっていく。

箱の中のおみくじが少なくなってきた、おみくじではないものが混ざっていることに気がつく。おみくじとよく似ているが、少しだけ大きい。白い紙が何重かに折られたものがひとつ紛れている。ほとんど汚れていないか

ら、まだここに入れられて間もないのだろうか。とりあえず無視して、他のおみくじを先に箱から出していく。他には特に変わったこともなく、箱の中に残るのは白い紙だけになったが、持ってきた五百円玉はまだたくさん余っている。私の推理力なんてやっぱりそんなものか。おみくじを全部引くという目標は達成したが、まさか別のもが入っているとは思わなかった。誰がこんなものを混ぜ込んだんだろう？

気になるので開いてみることにした。開いてもそんなに大きくない。でもおみくじを開いたのよりは少し大きいか。ボールペンで書かれたきれいな文字がびっしりと並んでいる。

『拝啓 この手紙を開いたあなたへ』

長かった冬も終わりを告げ、寒さと暖かさがせめぎ合いながら桜の季節が近づいてまいりました。いかがお過ごしでしょうか。

あなたは今、何について悩んでいるのでしょうか。

自分のアイデンティティの不在でしょうか。

自分の無力さによる絶望でしょうか。

他の人に対しての劣等意識でしょうか。

過去の自分の行為への反省でしょうか。

将来、未来についての不安でしょうか。

我儘な人類がしてきた所業についてでしょうか。

曲がった世の中で生きることへの苦悩でしょうか。

正しく生きなくてはいけないという意識でしょうか。

でも本当にそれらは大切なことでしょうか。本当に大切なことなんてこの世界にあるのでしょうか。もしあなたがこのようなことについて悩んでいるのなら、それこそがあなたがこの世界に対して誤魔化しや偽りを避けて、

ありのまま真摯な態度で向き合おうとしているということにほかならないのではないのでしょうか。あなたがこの世界の中に正しさというものを追い求めるなら、より善いものを追い求めるのなら、すでにあなたは善く生きています。そこにそれ以上の理由などいらぬ。世界と心から誠実に向き合う時、初めてすべての理由が意味を持ち、同時にすべての理由が意味を失う。それでいいんじゃないかな。

あなたの幸せを願っています。さようなら。』

ああ、なぜ忘れていたのだろう。ただ純粋に善人であらうという気持ち。これが答えなのかはわからないが、なぜか今は救われた気がする。こういう言葉を求めているのかもしれない。ひどく生きたくなくなってしまった。理由なんか無くともただ単純に善いことをやるべきだと思ってるんだ。優しさを持って日々を過ごすというプロセスこそが大切なんだ。明日何があるのか決まっていたって私にはそれが分からないし、誰にもそれは分からないだろう。いつ終わるかなんてわからないこの人生を死ぬ気でまっすぐ誠実に生きてやろうと思う。

この手紙だけを残して帰ると、おかしなことになりそうだし、なんとなく五百円を払って手紙も持ち帰ることにする。この手紙のおかげで自分の中に新しい考えが生まれた。来るときに比べ、質量は小さくなって中身の体積は大きくなったバックを前のかごに入れて、自転車で暗くなった道をのろのろと帰る。

家に着いたら、なぜかとても欲しかったものが届いていたり、気になっている人から連絡が来ていたり、ドラマとか小説だったら、こういう場合帰ったらなんか良

いことがあるんだろうけど、私には結局何も起こらなかった。ああ残念。

まあ人生っていうのは、甘酸っぱい果物に激辛ソースをかけて楽しむものかもしれないし、空っぽな心を見詰めたものでいっぱいになることかもしれないし、おみくじを全部引くということなのかもしれない。どこにもない幸せを必死に探し回って、踊らされてるって知った上で暴れて、踊り狂うものなのかもしれない。